

## 課題 映える【ばえる】

わたしたちの日々の生活は、さまざまなモノやコトに溢れている。そのありようを工夫することで、これまで気にかけてこなかったモノやコトが、際立ち“映える”ことがある。

どのようなモノやコトが、どのような背景に対して、どのように“映える”ことで、わたしたちの生活が豊かになるのだろうか。さらに、その豊かさを、他人と共有することによって、何がもたらされるのだろうか。また、それは一過性なのか、継続するのか。

“映える【ばえる】”をテーマに、北の地を舞台にした現代のすまいを考えてほしい。

### 計画条件

- 北海道内の地域と敷地、住戸形式、家族構成等は自由に設定してください。

### 賞金

- 最優秀賞 25万円（1点）
- 優秀賞 5万円（2点）
- 奨励賞 2万円（4点）

### 締切

- 2019年8月19日(月) 持参の場合は16時必着。  
なお、土曜日、日曜日は、受付できません。  
郵送の場合は8月19日消印有効。

### 参加資格

- 一般、学生等を問いません。
- 北海道内居住者とし（学生・生徒は北海道内の教育機関に在籍している者に限ります）。
- 個人参加、グループ参加は自由です。

### 提出物

#### (1) 図面

作品名、設計趣旨及び設計意図を表現する図面（縮尺は自由）。図面には、氏名、記号、サインなどを記入しないでください。A1(841×594)サイズ一枚、横づかい。表現は自由です。ハレパネ又はスチレンボー

ド（厚さ5mm程度）などでパネル化してください。

#### (2) 返信用ハガキ

受付番号をお知らせするために使用しますので62円の官製ハガキに応募者の住所、氏名を記入して提出してください。

（官製ハガキ以外は、受付できません。）

#### (3) 応募用紙

応募作品の「作品名」と応募者の郵便番号、住所、氏名（フリガナ）、所属先名（学生は、学校名・学年）、電話番号をA4版の用紙に記入して（形式は自由）応募作品とともに提出してください。

### 審査委員（委員は五十音順）

委員長 米田 浩志

北海学園大学工学部教授

委員 赤坂 真一郎

㈱アカサカシンイチロウアトリエ代表取締役

委員 小澤 丈夫

北海道大学大学院工学研究院教授

委員 小西 彦仁

ヒココニシアーキテクチュア㈱代表取締役

委員 佐藤 孝

北海道科学大学名誉教授

委員 澤田 貞和

㈱日本工房代表取締役

委員 松田 真人

㈱都市設計研究所代表取締役

## 選考経過

### ①一次審査 (2019年8月26日～30日)

一次審査通過者の受付番号は9月6日(金)に主催者ホームページ (www.do-kjk.or.jp/) で発表します。

### ②二次審査 (2019年9月17日10:00～)

一次審査通過作品からベスト10を選出します。

### ③最終審査 (2019年9月17日13:00～)

二次審査通過作品 (ベスト10) から各賞 (7作品) を決定します。

最終審査は「公開審査」とし、ANAクラウンプラザホテル札幌23階白樺で行います。

## 入賞者発表

### ・2019年9月下旬

入賞者に直接通知するとともにホームページでも発表します。

## 入賞作品の展示等

### ①2019年10月21日(月)～10月25日(金)

大五ビル 6階ホール(札幌市中央区大通西5丁目11)

### ②2019年11月15日(金)～11月17日(日)

札幌地下街オーロラスクエア

### ・1次審査通過作品は、協会広報誌「ひろば」(12月発行)に掲載します。

また、最優秀賞の方には、同誌への寄稿をお願いします。

## 応募作品の著作権等

- ・応募作品の著作権及び版権は、応募者のものとします。ただし、この事業の趣旨に基づいて、主催者が図書の出版や、新聞、雑誌、その他に掲載又は啓発宣伝などに利用する場合は無償で認めるものとします。

## 第44回「北の住まい」住宅設計コンペ 入賞者名簿

最優秀賞 三浦光雅 北海学園大学4年  
(共同作品) 佐藤拓未 北海学園大学4年

優秀賞 加持亮輔 株式会社 エスエーデザイン  
オフィス一級建築士事務所

優秀賞 長谷川怜史 北海道大学大学院2年

奨励賞 舘 龍太郎 室蘭工業大学大学院1年

奨励賞 柳瀬祥太 室蘭工業大学4年  
(共同作品) 川去健翔 室蘭工業大学4年

奨励賞 池田昇太郎 北海道大学大学院1年  
(共同作品) 大伏玄泰 北海道大学大学院2年

奨励賞 田村 幹 室蘭工業大学4年

・応募作品は原則として返却しません (返却希望の場合は、事務局に相談してください)。

## 主催

(一社)北海道建築士事務所協会

## 後援

北海道

(一財)北海道建築指導センター

(一社)北海道建築士会

(公社)日本建築家協会北海道支部

(一社)日本建築学会北海道支部

(株)北海道建設新聞社



表彰式

最優秀賞

# 「霞む住まい 澄む暮らし」

三浦光雅 (北海学園大学 4年)  
佐藤拓末 (北海学園大学 4年)

(共同作品)



「映える」という今回の投げかけに、作者は「霞む住まい 澄む暮らし」という美しく詩的な言葉でこたえてくれた。提案は、5層をなす塔状建築。中央に居室をもつRC造のコアがあり、その四周を半外部空間とし、階段やバルコニーがコアに巻き付くように配置されている。建物全体は、不規則なリズムで大小に割り付けられたフレームと、視覚的に透過性のある材料で覆われている。コアをなすRC壁は内側に傾斜し、半外部空間は上階にいく程大きくなる。一方、2階全体を半屋外空間として開放することによって、3階以上のRC造のコアは、空中に浮遊しているかのように見える。

敷地は、JR 銭函駅近くにある小樽市見晴町。海と山が近く、海岸沿に幅の狭い平地が東西に伸びる。この塔状建物は、南に迫る山と北に開ける海に対峙し、この土地独特の自然光、湿気、香り、風が織りなす四季と一日の変化に呼応することによって、まさに「霞む住まい」としてたち現れるであろう。そして、半外部空間には、日々の生活と、周囲をとりまく自然やまちの様相が直結した「澄む暮らし」が、楽しく浮かび上がる可能性が秘められている。

優れた空間構成、詩的なイメージと言葉を組み合わせた力作であるが、作者の言う「合理性」の解釈にやや疑問が残った。作者が言うように、建築を構成する「合理」と、それと相見えることによって生じる「映え」との相関関係については、より精緻で論理的な探求が必要であろう。

審査委員 小澤 丈夫

優秀賞

## 「場所と語らう家」

加持 亮 輔

株式会社 エスエーデザインオフィス一級建築士事務所



透き通る素材が建物の外周を張り巡らせ、内に行くほどに硬い壁へと幾重ものレイヤーがあり光、視覚、温度、音などのグラデーションがかかる、その間を行き来しながら周辺環境を感じ生活する場所を提案したものである。

断熱ラインが明確に内と外に分かれる現在の寒冷地住宅において、場所との関係が希薄になっていると作者は言う、そこにおいて多様なレイヤーは内外を曖昧にしつつも外部の環境と内部空間を美しく仕切り、それは様々なシーンをつくり出している。

傾斜屋根の天井の鏡面も内部の深くまで外部を映し込み多様な情景が展開され、まさに季節により、そして朝夕に様々な「映える」場をつくりだし、北の住まいに新展開を期待させる、ただし図式が強くこれを越える魅力的な建築的提案があればと思うが、優秀作品であるには違いない。

審査委員 小西 彦仁

優秀賞

## 「合わせ鏡の残像」

長谷川 怜 史

北海道大学大学院 2年



最近注目されている2拠点生活の提案です。東京と北海道、それぞれを楽しむ住宅の平面は、ひとつの長方形を凸凹線によって2分割したもので、合わせ鏡のように互いを補完し合う構成となっています。

小説風の文章や、線対称に表現された手描きドローイングによるプレゼンテーションは秀逸で、ライフワークバランスや過疎化の問題にも繋がる明快な提案は審査員を惹きつけました。

物語（ソフト）としての提案が美しいだけに、その先にある建築（ハード）にも同レベルの魅力を持たせることができれば、最優秀を十分に狙える強い作品になり得たのではないのでしょうか。

審査委員 赤坂 真一郎

奨励賞

## 「光彩の余剰」

館 龍太郎

室蘭工業大学大学院 1年



この作品は、シンプルな切り妻の半分には通常の住宅機能が収納され、残り半分には、住宅から張り出してきたデッキや階段が収納された大きなサンルームとして構成されています。このサンルームで、住宅部分で行われる生活を「映え」させ、例えば、夜間これらが光の中に浮かび上がる事で、個の生活が外部とつながっていくことを意図しています。

北海道では極めて一般的なサンルームの空間概念を拡張し、一見なんの変哲もない切り妻屋根の住宅に二つの空間を用意することで、新たな空間構成となっています。シンプルでスマートな扱いは、そのまま、実作品に転用できそうな可能性を感じさせるものです。

惜しむらくは、住宅からどういった行為がサンルームににじみだすのかのツッコミがやや不足しており、もっとぐちゃぐちゃした構成がシンプルなサンルームの中に展開しても良かったのではとの感想を持った作品でした。

審査委員 松田 真人

奨励賞

## 「Side 映え Side」

柳瀬 祥太 (室蘭工業大学 4年)  
川去 健翔 (室蘭工業大学 4年)

(共同作品)



テーマ“映える【ばえる】”には、インターネット上で写真共有するSNSの「インスタ映え」からの捉え方もあろう。この作品「Side 映え Side」は、このネット文化の「映え」の解釈から生まれた虚実の空間提案であり、ネット世界とリアル世界を鏡による虚像と実像に重ねている。

部屋を見ると虚像の鏡壁に空けられた開口には、帰宅した家族が突然に現れる事もあり、虚像空間にリアルな日常が同居する。外壁は鏡張りで、道を挟んだ石積みの擁壁が映る。この虚像のファサードに開けられた窓からは、リアルな生活が映える。

ネット時代にあって、テーマに素直に対応した「リア充」作品である。

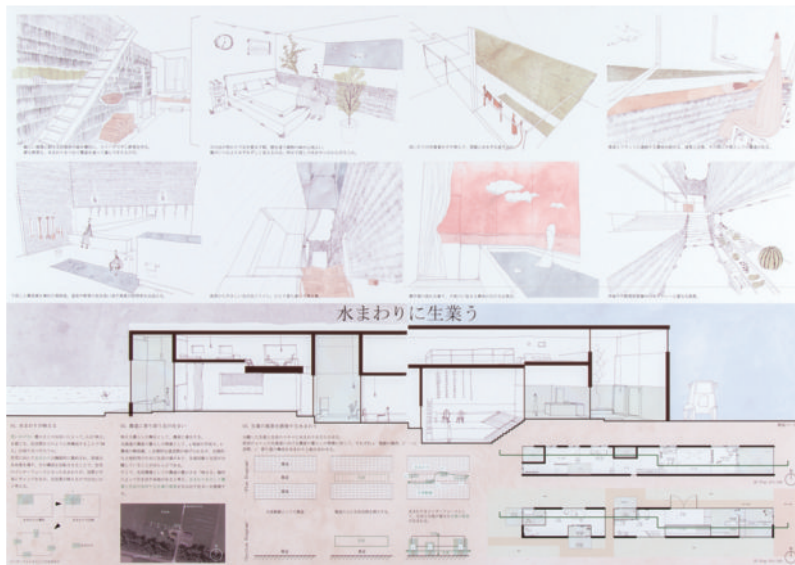
審査委員 佐藤 孝

## 奨励賞

### 「水まわりに生業う」

池田昇太郎（北海道大学大学院1年）  
大伏 玄泰（北海道大学大学院2年）

（共同作品）



水まわりの集約を解体し、住宅の構図を変える試みを農家住宅で実現しようとした作品。農業と生活が共存する生業風景は、北海道らしい住まいへの試みで興味をそそられた。

敷地は平坦で広大な農地の一角である。広い農地に住宅と道路が幾何学的な模様を描いています。

しかし残念ながら住宅の構図が変わるところまで来ていない。北の住まいの可能性を感じたが、新たな魅力ある空間が出来ていない。農業景観を楽しむだけでなく農作業と生活が共存する楽しい場を作ってほしい。例えば、住宅と農業用水路との関係、雨水や地下水の利用、住宅排水の農業への利用などを手掛かりに、農業と生活が共存する場を加えることにより、さらに魅力ある空間になりそうである。そんな夢を与えてくれる好作品である。最後に住宅のスケールが少し大きいのでは。

審査委員 澤田 貞和

## 奨励賞

### 「重なる生活とノゾキアナ」

田村 幹

室蘭工業大学4年



この作品は、不思議なとてもユニークな住宅です。2階高さの平行な壁に対して直角方向の2階高さの9枚の壁（ガラス製の引き戸）が細長い部屋のような空間を仕切っており、この建具を開けたり閉めたりして、生活の要求に応えるという仕掛けです。建具の開け閉めと、ところどころにある格子状のルーバーが相まって、外から眺めると実に不思議な光景が生まれ、時には奥の森まで透けて見えるかもしれません。無機質な街並みに対してこの住宅を挟むことにより、生活がそして街が「映える」効果を生み出しているように思えます。

そして、このレイア状のガラススクリーンの間には屋根のない外部空間が挟まれており、良い季節には様々な行為が可能になりそうです。

一方で、とてもユニークであるために、「本当に街に開いてしまっても良いのだろうか？ 街から覗き込まれていいのだろうか？」という疑問も湧いてきて、プライバシーとパブリックの間の格闘がもう少しあってもよかったのではと思える作品です。

もしかして、住宅の置かれる場所がこの住宅にふさわしい場所があったのかもしれませんが、或いは、生活をガードする異種のスクリーンが住宅の中に挟まれても良かったのでは？

審査委員 松田 真人

鎌田 晃 嘉

星槎道都大学 3年



山崎 巧 (室蘭工業大学大学院1年)  
浅野 樹 (室蘭工業大学大学院1年)

(共同作品)



三浦 光雅 (北海学園大学4年)  
大橋 凜翔 (北海学園大学4年)

(共同作品)



# 1次審査通過作品

岡本 凌

北海学園大学 4年



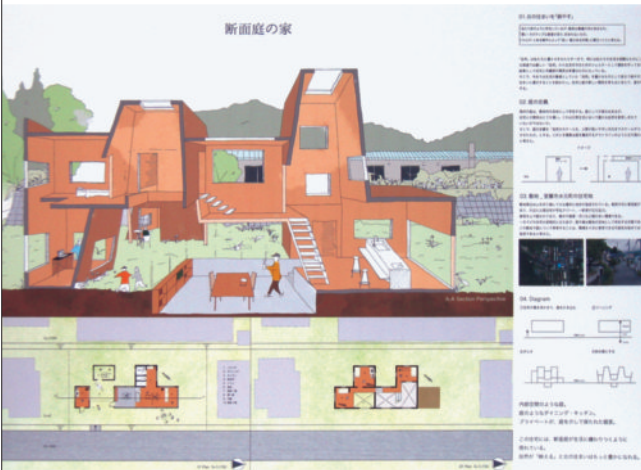
原田 芳貴

星槎道都大学 3年



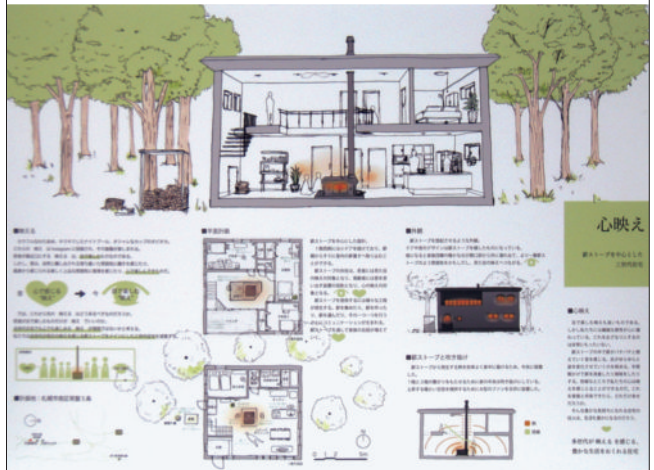
大西 将貴

室蘭工業大学 4年



石井 桃子 (札幌市立大学 4年)  
久津 将和 (北海学園大学 4年)

(共同作品)



浅井 敬太

室蘭工業大学大学院 1年



蝦名 鍊 (室蘭工業大学大学院 1年)  
吉住 佳子 (室蘭工業大学 4年)

(共同作品)





## 総 評

住宅を具体化する上で、何を最優先にするのか、その選択性は設計者のスタンスによって多様である。言うまでもなく、住宅は生活者のための器であり、その器に豊かさを与えるのが設計者の基本的役割である。その生活の目的性を前提としながらも、諸条件の組み立ての優先順位によって住宅の個性が生み出されていく。今回の課題タイトル、「映える【ばえる】」は、一見 SNS の表徴的なイメージを印象付ける用語ではあるが、この用語を通して、住宅の目的性を改めて問うたものである。「映える」を客観的にとらえると、「映える」ための「図」が、どのような背景としての「地」から生み出されるのか、その関係に着目できる。果たして、その「図」となるものが、生活なのか、建築なのか、あるいは建築の部分なのか、解釈は多様である。また、その「地」となるものが、生活なのか、建築なのか、あるいは建築の部分なのか、これも解釈は多様である。いずれにせよ、「図」に着目することによって必然的に「地」が生み出され、住宅の目的性を再確認できる機会であった。

今回、44 回目を迎える北の住まい住宅設計コンペの応募総数は 49 作品であった。総数としては近年において平均的な数である。8 月下旬に開催された 1 次審査において、各審査委員が 7 を持票として選出をおこなった。全投票において、1 票でも投じられたものが 1 次審査通過作品となった。今年は 16 作品が選出された。9 月 17 日に開催された 2 次審査会においては、16 作品から 10 作品を選出した。この 10 作品は、ベスト 10 入賞作品と位置付けられている。その後、同日午後には開催された 3 次（最終）審査会は、当日参加したオーディエンスを前に公開でおこなわれた。各審査委員から評価の視点を提示しながら、議論を重ね、投票を繰り返し、最優秀賞 1 点と優秀賞 2 点、奨励賞 4 点を決定した。

最優秀賞作品（三浦・佐藤案）は、初期の審査の段階から評価の高い作品であった。居住コアの外周部にアクティビティ空間を配置して生活の広がりを増幅させているのが特徴である。居住の純度が高いコアスペースと異なって、アクティビティ空間は生活の多様なシーンが展開できる空間であった。その空間を取り巻くファサードはランダムな木製格子によって包み込み、建築の輪郭を弱めながら生活そのものが「映える」建築形式を提案していた。完成度の高い作品であった。優秀賞作品（長谷川案）も、初期の審査から評価の高い作品であった。文学的なプレゼンを装いながら、現代的な住まい方が提案されていた。住宅を北海道と東京に構える二地域居住によって、生活の豊かさを新たに生み出すのと共に、相互の建築形式を合わせ鏡のように関係付けていた。生活と場所をどちらかに依存しながらも、片方の生活を残像として表出させたその着眼点は秀逸であった。場所の比較から生み出される「映え」のあり方はとても印象深かった。もう一つの優秀賞作品（加持案）は、北海道の気候風土とそこから生み出される現象に着目し、住空間にその特性を繊細に反映させていた。各方位における特徴を丁寧に読み込みながら、住空間に複数のレイヤーを配置していたのが特徴である。場所との対話は建築設計上必要不可欠ともいえる。その場所性を「映え」させながら、北の住まいのあり方に直接的に提案していた作品であった。奨励賞受賞作品 4 点もそれぞれ上位に劣らずユニークな視点を持った作品であったことも強調しておきたい。

このコンペの場において、「映える」ことの意味を、様々な作品を通して再考することができた。今まで様々な北の住まいのあり方が追求されてきたが、今後も将来に向けて絶えずアイデアが蓄積されていくことが予想される。このコンペは、可能性の追求そのものに重要な価値があると言える。SNS における「映え」は、刹那的なイメージではあるが、恒常的な建築においても偏在するものである。豊かな住環境を生み出すためにも、「映え」の探求は重要な意味を持つ。冬になると北海道は雪によって白一色になる。その中で、住まいが「映える」風景を幾度となく目にしてきた。北海道の住宅は、その雪景色との関係がすべてを物語っているのではないだろうか。

審査委員長 米田 浩志

# コンペ最優秀賞に受賞して

第44回北の住まい住宅設計コンペ最優秀賞受賞者

三浦 光雅（北海学園大学4年）

佐藤 拓未（北海学園大学4年）

（共同作品）

第44回北の住まい住宅設計コンペにおいて最優秀をいただいた。今回の受賞に際して、この誌面に寄稿文を書く機会をいただいたので、受賞作品について、受賞の感想をお話出来ればと思う。

今回のコンペの課題タイトルは「映える」であった。これは応募者達にとって悩ましいものであっただろう。まず、映えるとはどのような状態を指すのか考える。すると、それは全て相対化された概念であり、別の何かとの差異によって生じる状態だと言える。例えば、人工と自然、実像と虚像、都市と個人など、建築的な関係性を再編するようなイメージが湧く。しかし、このイメージには大きな落とし穴がある。それは、前回のコンペの課題タイトル「場所を受ける」とどう違うのか説明がつかなくなるということだ。つまり、住まいに対する何かを緻密に分析した上で、それに依存することなく、新たな全体性を獲得するような提案が求められていると解釈した。

一方で、私たちが映えるという言葉から真っ先に思い当たったのはピントの調節である。写真の背景部分をぼかし、対象物をくっきりと浮かび上がらせる撮影技法の1つだが、これを建築的手法に置き換えることを試みた。住まいは住人が暮らすための背景だとすれば、住まいをぼかすことで暮らしが際立つのではないか。我々は建築を見るときにスラブがあって、そこにドアや窓が開いて、中に入ると家具が置いてあって…といった具合に、スケールの序列関係によって認識している。ならば、その関係性を等価に扱うことで建築物をぼかすことが出来るはずだ。

また、当然のことだが、北の住まいとして革新的な案であるかというのも指標の1つだろう。北海道の雄大で厳しい自然環境に対してどのように向き合うのか、受け身になるのではなく、住まいの方から発信していくような応答関係を築くことが豊かな生活を送ることに繋が

る。私たちは北海道の住宅に多く見られるサンルームに注目した。住宅にサンルームを設置することは環境工学的な観点から北海道の気候風土に対して有効であることは間違いない。しかし、実際は消極的な空間に留まっていることが多く、冬期に物干し場や倉庫として利用されるサンルームは反って陰湿な印象を与え、時には恐怖さえ感じさせる。これは住宅の端部にくっつけるような場当たり的な配置計画に起因している。もっと住人の生活習慣の流動性の中でサンルームをつくることは出来ないだろうか。

これらを踏まえ、居室の外周部に廊下や階段等の動線を巻き付けるように設置し、半屋外化する。そしてガラスの窓サッシに一定の幾何学的なパターンを与え、スラブや造作家具の輪郭を隠すことでスケールの序列関係が失われ、半屋外空間を流動するモノとコトが際立って見えてくる。スケールアウトした住まいの中でアクティビティに溢れる暮らしにピントが合う状態が完成する。さらに、この空間を最大限に有効活用するため、建築面積を出来る限りコンパクトにし、高さ方向にボリュームを拡張した塔型の住宅を提案した。住人が積極的に半屋外空間に飛び出し、周辺地域に対して生活の懐を垣間見せることで豊かな風景やコミュニティをつくるきっかけとなる。また、幾何学的なパターンで構成されたファサードが住宅に全く新しい全体性をもたらしている点もこの提案の魅力だろう。

今回の受賞に関しては、私たちが信じた北の住まいの在り方が間違っていなかったという自身に繋がった。しかし、それと同時に、多くの講評をいただく中で、この提案は未完成であることが浮き彫りとなり、まだまだ修練が足りないことを痛感した。北の住まい住宅設計コンペは北海道の建築に携わる者としてのカンを養う絶好の機会のように感じる。次回も多くの刺激的な作品が集まり、発見的な議論が展開されることを願う。

